日御碕神社の世襲宮司家に関する研究

－「神の子孫」の宗教的正当性をめぐって－

大江 清子

本論では、島根県の日御碕神社を事例とし、始祖天葺根命から 98 代続くという世襲宮司家 H 家の「神の子孫」を、出雲の「シャマニズム風文化」(野村 1978)の中に捉え、さらに神社神道の神職である「神の子孫」を「祭司」として、シャーマンと対比的に取り上げて論じた。野村による出雲の「シャマニズム風文化」とは、実際にトランスが起こるか否かは問わず、神事での託宣や神がかりが信仰において、中心的に重要視される文化のことである。本論では、日御碕神社世襲宮司家 H 家の第 98 代目である現宮司 T 氏、次期宮司候補の禰宜 M 氏、そして H 家分家当主であり一般職に就く A 氏に対して、「神の子孫」であることの当事者の認識や神事場面における祖先神の捉え方、信者との関係など聞き取り調査を行なった。その結果、日御碕神社の「神の子孫」は、「血脈によって引き継がれる始祖の霊威＝血筋の神聖性」、「血筋による世襲」、「神話の再現」、「伝統儀礼の継承」に、宗教的正当性を見出すことがわかった。そして、日御碕地域の住民によって「神の子孫」は特別な家筋の人々だと認識されていることも明らかとなった。このように血脈や伝統を強く意識する、今を生きる「神の子孫」の語りは、神代の時代から続く多くの「generation」(野村 1988)の上であり、長い世代の中に「神の子孫」を捉えている。さらに、神職の語りからは、「神がかり」状態にならないことが、神職の資質だという認識などを窺うことができ、神がかり状態で託宣を行うような民間巫者との間に明確な断絶が意識されている。長く血脈や宗教的伝統を継承する、日御碕神社の世襲宮司家の人々の当事者認識に焦点を当てることによって、世襲神職が民間巫者にコントラストを与えようとしていることが明確となった。なお、神職と民間巫者に見られるこのコントラストについては、M.ウェーバーによる「日常的なものの神聖性」を持つ「世襲カリスマ」と、「非日常的なものの神聖性」<霊能カリスマ>との際立った差異とパラレルであると捉えられることを示唆した。両者の関係を理念型を用いて捉えるようとするのは、今後出雲の宗教社会の中で、伝統的な神社神道と民間巫者がどのような連環にあるかを理解することに役立つと考える。本論は、出雲における宗教社会の中に、神職と民間巫者を構造的に捉えるための基礎的な位置付けの研究となった。今後は神職だけでなく、

2024 年度立命館大学大学院社会学研究科修士論文要旨

民間巫者を聞き取り調査の対象とし、出雲を中心とした宗教的社会の構造を立体的に捉えることを課題としたい。